
すべてが死んだ牛になる -The Imperfect Outsider-

久木 秋啓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すべてが死んだ牛になる - The Imperfect Outsider -

【Nコード】

N4224M

【作者名】

久木 秋啓

【あらすじ】

ある日、マニアックな映画を上映している高田馬場の映画館を訪れた「俺」は、奇妙な現実にさまよいこんでしまい……。

日常とのわずかなズレを描いたSF。

某月某日の日記より。

この前、高田馬場の某映画館に行ったら、不思議な体験をした。誰かに話すのもあれだし、日記に書くくらいが一番いいのだ、きっと。

そこは、いわゆる名画座というやつで、普段は一日二本、むかし公開されていた映画を上映するような映画館。たまたま「シウルレアリズムと映画」というテーマで、好きなダリの映画なんかをオールナイトで上映する、という情報を発見して行ってみた。ほんと、滅多にない機会だと思ったので。

夕方頃に映画館について、その日の上映作品なんかの書いたパンフレットを受け取って、席に着く。ガラガラかと思っていたけど、何人かちゃんと入っている。ここいらへんはさすが東京だなと思う。

ちなみに映画を見る時は基本、一番前の席に座ることにしている。中身によっては気持ち悪くなったりするし、『マクロスF』の時は画面の端が見えなかったりしたけど。バカの一つ覚えのように、真ん前に座っている。今回もそう。いくつか離れた席におっさんが一人座っていた。眼鏡にヒゲに長い髪をたばねて、という気合いの入ってる人っぽかった。

で、ブニエルの『気狂いピエロ』という有名な作品からスタート。タイトルは知ってたけど、見たことなかったもので、これは普通におもしろかった。こんな感じの内容なんやね〜、と。

その次にあつたのが、ダリとブニエルが共同監督した『アンダルシアの犬』。個人的な趣味で何回か見てたし、学校の授業でも見ていた。グロかったり、意味不明だったりするけど、かなり好きな作品。

最初に違和感を感じたのは、その時だ。

男がピアノにひもをつけて引つ張るシーンで、ピアノの上に死んだロバが二頭のせてあったと思っていたんだけど、それが「死んだ牛」だった。

はて、と思った。ダリは他にも「腐ったロバ」とか描いてたから、ロバだと思ってたんだけど、どうやら記憶違いだったらしい。

そうこうしているうちに映画は終わり。「いや、いい映画だった」とか思いつつ、パンフレットを確認してみても、びっくりする。

『デューン 砂の惑星』（監督アレハンドロ・ホドロフスキー）

が、最後の演目となっていたのだ。

何に驚いたかというところ、この映画、存在しないはずの映画だったのだ。

最初、このホドロフスキーという監督が担当する予定だったが、資金繰りが苦しくなったか何かで、デヴィッド・リンチという監督に交代した、って話だったはず。

ホドロフスキーが監督する予定だったほうの『デューン』は、デザインをダン・オバノン（『エイリアン』とか『バタリアン』の）が担当し、音楽をピンク・フロイド、さらに役者としてサルヴァドール・ダリが登場する、ということ、俺にとっては最高の布陣になるはずだった。未完になったのが、残念でならないと思っていたが、なんで、これがいま上映されるのか。

パンフレットを良く読むと「撮られていた映像を繋ぎあわせて作られた非公開放」が存在していた、ということ、それが上映されるらしい。それってありなんか！？と思っただけ、正直、めっちゃ嬉しくて興奮していた。

メキシコあたりの砂漠を飛行するOPクレジットに、ピンク・フロイドの「トゥーソン」という沈み込むような深いギターの音色が

重なった瞬間にもう涙が出た。そこから先はもう奇想天外な映像世界。未完成作品なので、まあ、ストーリーが繋がらない。普通、カットするようなシーンももつたないからつつこんだみたいで、テンポも悪い。効果音とかはさすがに適当だし、音のないシーンまであったりする。

それでも、最高の映画だと思った。

で、いよいよ待ちかねていたダリが登場した。不思議な服装だし、奇抜なメイキャップだし、これダリじゃなくてもいいんじゃないの、とか思ったけど、かっと思開いたあの目で、ダリだとはつきり分かった。

にやり、とこっちを向いて笑うショットでは、ちよつと背筋がぞくぞくとした。実際に、目があったくらいに錯覚を感じるくらい。動くダリを見たのは、2回目くらいで、なにしろ一番尊敬する画家なので、妙に感動してしまった。

そうこうしているうちに、映画は終わってしまった。途中でばつさりとは切られる感じね。最初から最後まで、なんかもういかがわしさ満載のフィルムだった。

そこまでなら、まあ普通にいい話で終わるのだが。その後が少し……。横のほうに座ってた、おっさんが俺の興奮しているのに気づいたのか、にやにやしながら話しかけて来た。

オールナイトの上映も、ちょうどそれがラストで、劇場を出ようとしている時だった。

「デューン、はじめて見たの？」

みたいな感じで声を掛けられた。

相当映画好きの人らしくて、俺のような生半可な知識ではついていけないような雰囲気だった。正直、あんまり初対面の人と話すのは嫌なので、逃げようかと思ったけど、仕方なくしばらく雑談した。まあ、人の良さそうな感じではあったし。

が、その人との会話が妙に噛み合わない。バーホーベンとリンチが共同監督した『スターウォーズ』も酷かった、とか言うわけだ。

バーホーベンというのも変わった監督で、ジョージ・ルーカスに『スターウォーズ』の監督をしないかと打診されたものの、結局、『スターウォーズ』はやらなかった。はずなんだが。

デヴィッド・リンチのほうも、『スターウォーズ』をやらないか、と言われたけど、それを断ってホドロフスキーがやり残した『デューン』を監督した。はずだったのだが。

だいたい、どちらも個性が強すぎる制作者同士らしいので、一緒になんてやれるとは思えない。逆に一緒にやったのなら、どんなものになるのか、すごく見てみたいと思う。

また違和感を感じながら、これも記憶違いかなと思った。無かったことにされているけど、実はちよつと撮ったぶんがあったのかも知れない。

自分もけつこう適当だなあ、マニアって良く知ってるなあ、と思いつつ聞き流した。

そのうち自然と会話も途切れて、おっさんは出ていった。

そこで、ようやく、今日の『デューン』みたいに、流出版が造られてたりするのも知れないと気づいたわけ。

いちおう聞いておきたいと思って、劇場を出てきよろきよろしてたら、裏路地に入っていくおっさんが見えた。

んで、急いで走って行って、おっさんの背後から声を掛けた。

ここから先はちよつと、信用してもらえないかも知れない。

怪奇現象とかは基本信じない俺なので、なんつーか、自分でも、自分が見たのが本当にあったことだったのか、ちょっと信じられない。

おっさんはゆらゆらした足取りで、暗い路地の奥へ歩いて行っている。

声を掛けても返答がないので、肩を叩いてみた。

そしたら。

ゆっくりと振り返ったおっさんの顔が、「死んだ牛」の頭だったわけ。

文章で書くと、ばかしいけど、実際、体験してみると、もう……。

いま冷静になってみても、まだ怖い。

ピカソとかの描いた牛頭に少し崩れた腐肉をくっつけたような感じ。

片方の眼窩はぼっかりと開いていて、もう片方にはどろっとした死んだ目が揺れている……。

なんか叫んだような気はするし、走って逃げた気はするけど、正直、その後のことをあまり覚えてない。

気がつくと、駅の改札にいて、既に始発が近かった（あたりはまだ薄暗かったけど）。

怖くて仕方がなかったので、速攻で改札を抜けて、電車に走った。心臓ばくばくだったものの、誰かに話しても信用されそうにない。また戻って確認したくもない。

電車が入ってきてからは追いかけてきていないか、立ったまま見

ていたけど、特に何もありません。そのうちに電車が動き出した。ぐったりしながら家に帰り着いて、寝ようと思ったけど、寝られない。

結局、誰にも相談しないまま何日か過ぎて、これを書いてみたわけだ。

調べてみて、判明したこと。

(1) 『アンダルシアの犬』に出てくるのは、やはり「死んだ口バ」で、「死んだ牛」じゃない。

(2) 『デューン』ホドロフスキー版は、やはり存在していない。

(3) 『スターウォーズ』バーホーベン&リンチ版も、やはり存在していない。

と、すると、あの日の出来事はいったい何だったのか。

映画の幽霊？ そんなまさか。俺の「妄想」？ それは非常に困る（笑）。

そのどちらでもないとしたら、何なんだろう？

そう考えていて「死んだ牛」というキーワードで、ふっと思い出したことがあった。

死んだ牛、DEADBEEFか、なるほど……。

昔のコンピュータプログラミングで、そんな「数値」を使うことがあったらしい。

コンピュータは基本、十六進法なので、0123456789までの数字とABCDEFのアルファベットで数字を書く。その時にABCDEFだけで（つまり数値だけで）書くことができる言葉の一つが「DEADBEEF」。「死んだ牛」なのだ。

このキーワードはデバッグする時に使われる。データの中に一種の標識としてDEAD BEEFという値を書き込んでおくと、後からそれを検索して、目的のデータを探し出すことができるわけだ。

そこで連想したのが「シミュレーテッド・リアリティ」という仮説だ。

非常にSF的なのだが、「この世界は実在しているのではなくて、巨大なコンピュータの中でシミュレーションされている、仮想現実なのだ」という説だ。

ばかばかしく思えるかも知れないが、実は真面目に検証しようとしている科学者もいる。宇宙は巨大な量子コンピュータだ、という説は実は既に証明されているし、意外と突拍子もない説ではないのだ。

『マトリックス』なんかも、そういう仮説があったからこそ作られた映画だったりする。

しかし、その説を唱える人も見落としている点がある。

つまり、世界がプログラムされたものだとしたら、それをプログラムした何者かがいる、ということだ。

そして、現実世界のプログラムを考えてみれば一目瞭然だけど、プログラマーで「バグ」を出さないやつは決していないだろう。

とすれば、この世界にも「バグ」は潜んでいるんじゃないだろうか。

俺が遭遇したのも、そんな「バグ」の一つだったのかもしれない。例えば、あのおっさんが。

で、外の世界の誰かが「DEAD BEEF」を頼りに、その「バグ」を見つけ出し、修正してしまったんじゃないだろうか。

だから、今から調べたら『デューン』も『スターウォーズ』も無

かったことに、なってしまうているのだ。

ひょっとしたら、いままで俺がさんざんバカにしていた超常現象とかも、そういうものなのかも知れない。

それを体験した人はたしかにいて、でも、後から調べると、痕跡は修正されてしまって見つからない。そういうことなのかも知れない。

俺も少し信念を曲げた方がいいのかも知れない。

でも、まあ、「超常現象」世界のバグ説」なんて唱えても、さらなる変人扱いされるだけだろう……。

日記に書くくらいが、一番いいのだ、きっと。

ああ、それにしても『デューン』は良かった。『スターウォーズ』版も見なかった。

しかし、現実っていったい何なんだろう。

この物語はフィクションです。実在する人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4224m/>

すべてが死んだ牛になる -The Imperfect Outsider-

2010年10月28日07時27分発行